

実践報告

兵庫県稲美北中学校におけるコミュニティ・スクールの取組 —『北中プライド』を創り出すために—

北谷錦也^a，松尾哲子^b，諏訪英広^c

^a 兵庫県稲美町立稲美北中学校 kitatani@inami.ed.jp

^b 兵庫県稲美町教育委員会 tetsuko_matsuo@town.hyogo-inami.lg.jp

^c 兵庫教育大学 hidesuwa@hyogo-u.ac.jp

要約：様々な背景のもと、喫煙や器物損壊、授業放棄、暴力行為（対教師暴力を含む）などの問題が多発するいわゆる「荒れた学校」であった稲美北中学校の立て直しは、町教育委員会及び校長（筆者）をはじめ北中教職員の責務であり、地域・保護者の切実な願いであった。そのため、学校は校長のリーダーシップのもと、生徒たちの自己肯定感や自尊感情を高める様々な取組を行ってきた。また、町教育委員会は教育長（筆者）のもと、それらを最大限に支援していった。取組の成果が表れ、学校が落ち着きを取り出した頃、さらなる学校改善を目指して、コミュニティ・スクール（以下、「CS」）の導入が教育長より提案された。CSに新たな可能性を見出した校長は、町教育委員会の支援を受けながらその実施に向けて研究・実践を行った。

本稿では、CSの導入の背景や経緯、そしてCSの取組により生徒たちの自尊感情が高まっていった実践を報告する。

キーワード

荒れた学校
自尊感情
コミュニティ・スクール
生徒の変化
教育委員会の支援

1. 問題の背景と発表の目的—教育長として—

筆者（松尾）は、本県で小学校の教師を21年間、町教委で5年間、小学校教頭として5年間、小学校校長として5年間勤めて、6年前本町の教育長となった。そして、初めての学校訪問で稲美北中学校を訪れて驚いた。噂には聞いていたが、その実態は想像以上で、授業中にもかかわらず校舎外にたむろしている生徒達、廊下を徘徊している生徒、机に伏して眠っている複数名の生徒、教師の話は全く聞かずにおしゃべりに興じている生徒。そして、そんな教室内で淡々と授業を進めている教師。「やる気」を削ぐ雰囲気の中、これでは学力向上など到底望めない。まずはこの学校を何とかしなければ、何とかしたいと思った。

それから何度となく、稲美北中学校を訪問。連休には、教育委員会の職員と共に交代で見回ったりもした。そして、教師たちの日々の苦悩に心が痛んだ。生徒の問題行動や保護者対応に追われ、地域の人からも届く多くの苦情への対応。教師達は疲弊していた。そんな状況の中、校長は教師だけの対応では限界があると、生徒の様子を授業公開という形でさらけ出し、保護者に改善の協力を求めていった。当時のPTA会長は毎日学校に来ては、生徒達の様子を見て回り、会長の名で懇談会を開催したりなど、PTA会長のみならず役員たちも、そして保護者達も、わが子の実態を目の当たりにして、何とかしなければという思いを共有した。

その思いが届いたのか、写真1（授業の様子）に見られるように生徒は次第に変わり始めた。その要因は、校長のリーダーシップの下、教師達の意識の変化、それを促した保護者の行動だった。このことで、学校に外からの風

を吹き込むことの意義を実感した。

そうした時期に、兵庫県ではまだまだ聞きなれない CS に目が留まった。X 県の P 中学校は、かつて非常に問題行動の多い学校であったが、CS を導入することで、生徒が落ち着いて学習に取り組めるようになってきたというのである。そこで、CS の可能性を感じ、CS の導入を検討することとした。

さて、この 4 月に CS を導入して以来、近隣市町からの問い合わせがいくつかある中で、メリットについて問われる事もあった。従来の学校評議員会が機能している、学校ボランティアの活動が活発で学校はとても助かっている、この上にどうして CS を導入するのかと。それは、まさに 6、7 年前の筆者の学校長時代の思いと同じものだった。おそらく全国には、このような思いを抱いている人たちはまだまだ多いのではないと思われる。CS が制度化されて以来、導入校の増加率は芳しくなかったことから推察される。また努力義務化された今、今度は形式的な CS が増えていくのではないかと少し不安な中、私達の CS の導入、そして実施について模索している状況を発信することは、これからの CS の導入を考えている自治体への多少の参考になると思い、実践報告することとした。



写真 1 授業参観の様子

2. 稲美北中学校 CS 導入に向けた取組—教育長として—

新年度になり、これまでのいきさつをよく知る教頭が校長になり、まずは校長と CS に対する思いや期待を共有したいと考えた。同時に校長の思い、稲美北中学校をどんな学校にしていきたいのかも理解した上で、共に CS の取組の方法を考えていきたいと思った。また、新しい取組には少なからず現場の教職員の抵抗はあるものである。そうした教職員を含めて、CS を前に進めていくには、一番身近なリーダーである校長の思いが大きく影響するはずである。教育長からのトップダウンでなければならない CS ではなく、学校改善に期待の持てる CS であるために、まずは CS を知ることから始めていった。

そこで、まずは先進校等の視察に校長を同行させた。

・ X 県 P 中学校

P 中学はかつて問題行動が頻発していた時に CS により問題行動が減少した実績がある。同時期に始められたシニアスクールでは、大人がいきいきと学び、それを生徒が間近で見ているという点で非常に参考になった。

・ Y 県 I 市教育委員会

I 市は平成 26 年度から 5 年計画で全市の小中学校に CS を導入しようとしている。CS を導入したきっかけや、それまでの具体的な流れなどを聞き取った。

・ CS マイスター訪問

稲美北中学校の教職員に CS についての専門的知識が必要であることから、講演会を企画し、講師依頼するために CS マイスターを訪問し、CS の有効性などを聞き取った。それまで漠然と捉えていた CS が訪問調査や CS マイスターの話から、非常に具体的な像となり、目指す CS が実現可能に感じられた。稲美北中学校独自の CS の模索も始まった。写真 2 は、そのような職員研修の様子である。



写真 2 CS に関わる職員研修の様子

こうした実際の活動の様子や CS マイスターの話から、校長は CS に対する期待度が高まってきたように思えた。また、想定していた学校運営協議会のメンバーに相談したところ、想像以上に好意的な手応えを感じ、自分の思い描く学校と地域の関係が具体的なものとして形になってきたと思われる。

校長へのインタビューでは、教頭時代に生徒の学びに向かう姿勢や、地域の人たちの冷ややかな目をとても残念に思い、何とか改善したいと思っていた矢先の CS の話だった。訪問調査、CS マイスターの話、地域の人たちの思いに触れるにつれ、CS に対して急速に肯定的な意識に変容していった。創設時の地域の人たちの学校に対する期待や思いを考えを巡らせ、再度この地に稲美北中学校がある意義を問いかけた時、そこに CS の有効性を見出した、と話した。

さらに CS に対して教職員はどのような意識を有しているのかも把握したいと考え、CS に関する教員アンケートを実施した。1 回目（2017 年 5 月）は、CS の概要を示した 1 枚の資料を配布した上で実施し（回答者 34 名）、2 回目（同年 8 月）は CS マイスターによる講演会後に実施した（回答者 25 名）。2 回の調査結果を示したものが表 1 である。「わからない」を除いて、各項目の平均値（1～4 点）を算出し、3.0 を肯定的回答の基準とした。

表1 コミュニティスクールに対する教員の意識

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
	負管理職が増える	が学校運営協議会の成果	き会（類似）の度（違い）が校評議会で	業従来の変わらな支援本部の事	弁活動や委員謝礼の支	は制度が形骸化する	人材が得られな委員の	十学校で支えよう本部事業でも	る民の声を反映させたい	事任用の混乱を見出し	が特定委員の発言で運営	が教育委員会からのサポート	得保に保護者・地域の協力が	れ学校の自律性が損なわ	起委員同士の意見対立	生教員が上ねない学校間格差
1回目	2.11	2.05	2.31	2.69	2.21	2.21	3.36	2.77	2.75	2.17	2.08	2.83	3.16	2.96	2.58	2.73
2回目	2.04	3.33	3.32	3.56	2.75	3.11	3.00	3.15	3.70	3.05	2.83	3.30	3.29	3.38	2.53	2.83
差	-0.07	1.28	1.01	0.87	0.54	0.90	-0.36	0.38	0.95	0.88	0.75	0.47	0.13	0.42	-0.05	0.10

注：「差」は、2回目の値から1回目の値を引いた値であり、差が+の場合、太字で示している。

1 回目は、「学校運営協議会委員の人材が得られない（3.36）」「保護者・地域の協力が得にくい（3.16）」などが肯定的に見なされる項目であった。また「学校の自律性が損なわれる（2.96）」が 3.0 に近いことから、自律性阻害の懸念は少ないことが伺えた。1 回目と 2 回目を比較すると 1 回目は 3.0 以上の項目は 2 項目、2.5 点を下回った項目が 7 項目あったのに対して、2 回目は 3.0 を上回った項目が 11 項目に、2.5 を下回ったのは 1 項目（「勤務負担が増える」）のみだった。また、1 回目のアンケートに「形式的な説明だけで進行すると、業務量が集まるところに集まり、限られた人間だけ負担を強いられるのではないかと書いていた教員が、教職員へのインタビューでは、「授業前の人としての生活の部分、自分らでなんとかしていこうと意識させる取組ができるのではないかと」「子ども達の、地域の人に支えられているという感覚や、傍にいて見守ってくれているという安心感を、地域の人にもわかってもらいたい」など好意的な意識に変容した。アンケートの中で一番否定的だった「管理職や教職員の勤務負担が増える」の項目についても、「新たな取組には負担が増えて当然だけれども、やりがいがある」と負担感を感じていない様子も伺えた。

アンケートやインタビューを通して、生徒や教師が変わりつつある今をチャンスと捉え、自分も何かやってみたいという意気込みが感じられた。その背景には校長の日頃の言動とリーダーシップが影響していると推察される。

教育委員会としては、まずは予算取りである。町長、副町長に話をし、議会で説明しながら理解を求め、そのための必要な資料を整え、「稲美町立学校における学校運営協議会の設置に関する規則」を作成するとともに、担当者は稲美北中学校の準備委員会には全て参加し、同じ方向を向いて進んでいるという安心感を持ちながら、粛々と事務を進めていくことが重要だと考えている。そして、4月にスタートした今は、後方からのサポートにまわり、学校と学校運営協議会が前面に立って、自分達の学校の、自分たちの地域の子どもたちの、将来あってほしい姿を思い浮かべながら、独自のCSを作っていくって欲しいと思う。

3. 稲美北中学校「コミュニティ・スクール」の取組

(1) 稲美北中学校の概要

本校の所在する稲美町は、兵庫県南部、姫路平野の東部にあり、東は加古川市、西は神戸市西区及び明石市に隣接している。古代では「印南野」あるいは「稲見野」と呼ばれており、これが町名の由来となっている。江戸時代より多くのため池を造り水田化に努めたため、ため池密集地となり、県下の穀倉地帯の一つとなっており、田園とため池に囲まれた自然豊かな美しい町である（写真3）。また、全体的に田園都市であるが、農業基盤の整備を強化しながら阪神地区のベッドタウンとして、1960年代から南部を中心に宅地開発が進められてきた。面積は34.92km²、人口3万1020人（2015年）となっている。



写真3 上空より見た学校の周辺

町内には、5つの小学校と2つの中学校がある。本校は、1985年に稲美中学校の生徒数が増加したことにより新設され、本年度で34年目を迎えている。本校には、校区内の2小学校（加古小学校、天満小学校）から生徒が入学しており、当初は20学級を超える大規模校であったが、少子化とともに生徒数は減少し、現在は表2に見られるように全校生429名（通常学級13、特別支援学級3）の中規模の学校である。写真4は、本校を正門から見たものである。



写真4 稲美北中学校 正門

表2 生徒数（2018年11月1日現在）

	1年	2年	3年	計
男子	60 (3)	89 (0)	76 (0)	225 (3)
女子	66 (1)	78 (1)	60 (1)	204 (3)
計	126 (4)	167 (1)	136 (1)	429 (6)

() 特別支援学級生は内数

校区は、古くからの集落と新興住宅が混在した地域であり、住民の考え方にも若干の隔たりが感じられるが、地域の人々の人情は概して厚く、学校教育に対する期待も大きい。ただ、個々の家庭を見れば、経済的格差が見られ、それを背景に子どもたちの生活も安定せず、創立当初より生徒指導上の課題が心配されていた。そのような中、生徒指導上の『荒れ』という状況が見られることもあ

ったが、地域の支援もあったことで生徒たちは頑張り、大体は落ち着いた学校生活を送っていた。しかし、10年ほど前より社会情勢を反映し家庭の経済力・教育力の二極化がさらにすすむ中、問題行動が多く見られるようになり、数年前には喫煙や器物損壊、授業放棄、暴力行為（対教師暴力を含む）などが多発するいわゆる教育困難校の中に入るような学校であった。

生徒の様子を全国学力・学習状況調査の生徒質問紙から見ると、「自分にはよいところがある」「難しいことでも失敗を恐れないで挑戦している」「ものごとを最後までやり遂げてうれしかったことがある」「将来の夢や希望を持

っている」等の自尊感情や自己肯定感、学校生活の充実度に関わる質問項目において全国平均より低い結果となっている。また、校外での喫煙や喫煙、通学マナー等により、地域からも「北中は。北中生は。」と眉をひそめられる存在であり、地域の信頼も失っていた。生徒も教職員も自信を失い、自尊感情や自己肯定感が極めて低い状況であった。現3年生に中学校入学前、北中をどのように見ていたかを聞いたアンケートからも良いイメージを持っていなかったことがわかる(表3)。

表3 (問) 中学入学前(小学校の頃)、北中のことをどのように思っていましたか?

3年男子	自分自身はあまり知らなかったが、親は悪いイメージがあったようだ。
3年男子	とても荒れていてヤンキーと呼ばれる方たちが多いと思っていた。
3年女子	良い人と悪い人の差が激しくて、あまり良い印象は持っていなかった。
3年女子	荒れていて、治安の悪い学校。
3年男子	ヤンキーが多く、入学すると自転車のタイヤの空気を抜かれると思っていた。
3年女子	荒れていると地域の人から聞き、少し不安があった。

上記のような荒れた時期から見ると、ここ数年で急激に問題行動が減少し、落ち着いた学校へと変わってきた。授業や部活動に対しても前向き

きに頑張る生徒が増えてきている。特に生徒会活動が活発になり、生徒が主体的に活動できるようになってきている。地域からも「北中、ようになったなあ」「北中生はよく挨拶してくれる」などの声が聞けるようになってきている。もちろん、自然に落ちてきたのではなく、学校をよくするための生徒や教職員の取組があった。

(2) 学校を変えた取組

①『北中プライド』のスローガン

「地域を愛し、地域に愛される学校」をめざして、創立30周年を迎えた平成26年度に、生徒・教職員・保護者・地域が1つのチームとなり、笑顔あふれる北中の再生をめざそうと、「チーム稲美北」「北中ルネッサンス」をスローガンとした。そして、28年度よりは、さらにこの稲美北中学校で学んだことに誇りを持てるような学校、自分自身や仲間を大切に思い、一緒に学んでいることに誇りを持てるような学校、一人ひとりが自分の可能性を信じてがんばれる学校、互いを認め合い、一人ひとりが自分のやるべきことを知っている学校をつくっていこうという願いを込めて「北中プライド」をスローガンとした。このスローガンには、地域を愛する生徒を育てるとともに、地域に愛される学校でありたいという願いを込めた。

②生徒会を中心とした活気ある学校づくり

- ・生徒会による「ネット・SNSに関わるルール作り」(平成27年12月生徒総会)(写真5)
- ・生徒会執行部とPTA役員、学校評議員(学校運営委員)との座談会(写真6)

※「親と子でこんな学校つくろうや」をテーマに、創立30周年を迎えた平成26年度より、年に1~2回行っている。この座談会がきっかけとなり、奉仕活動や桜の植樹が実施された。また、生徒会の「ネット・SNSに関わるルール作り」が始まった。「ノーチャイム」制の実施では、条件整備について協力を得た。

- ・「ノーチャイム」(平成28年12月より実施)(写真7)
- ・生徒自身による学校生活基本指針「INAKITA ISM」の制定。(平成29年12月生徒総会)(写真8)
- ・生徒会が中心に学校行事の運営⇒体育祭、文化祭(音楽コンクール)、新入生説明会、3年生を送る会など
- ・横断幕等を作成し、地域へのPRと啓発



写真5 ネットルールの横断幕



写真6 座談会：生徒会より学校生活の報告



写真7 テレビでも取り上げられた『ノーチャイム』

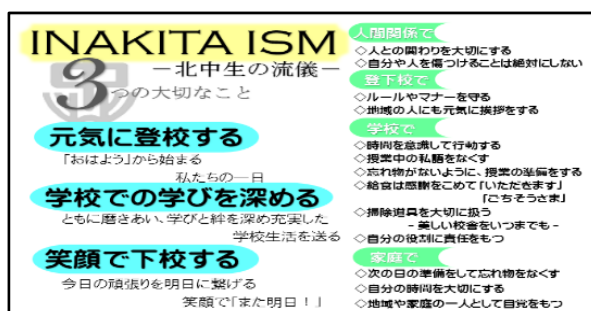


写真8 北中生の生活指針 INAKITAISM

- ・「ボランティアスピリット」の呼びかけ、提案（平成30年6月生徒総会）（写真9）
- ・全校生による地域清掃活動の実施（平成30年12月）

③家庭・地域との連携

- ・校内合唱コンクールや「3年生を送る会」にPTAコーラスも参加し、3月の「3年生を送る会」では、PTAコーラスと3年生全員による合唱を行う。

※生徒の成長を見守るとともに生徒との交流を深め、大人自身もともに学んでいきたいとの思いから、「北中 PTA コーラス」が12年前から始まった。近年は、保護者の皆さんだけでなく、地域の方々や卒業生も加わり、舞台発表も文化祭はもとより、「いなみ野音楽祭」や連P実践発表会にも出演している。

また、「3年生を送る会」のステージでは、生徒と心をひとつに合同合唱にも取り組んでいる。コミュニティ・スクール初年度の平成30年には、コーラスの名称も「北中コミュニティ・コーラス『North Wind（北の風）』」とし、活動の幅を広げている。

- ・生徒会の取組を校区育成協（稲美北中学校区青少年健全育成推進協議会）が支援し、横断幕、啓発用のぼりを作成し、体育祭等の学校行事や地域行事の際に掲示し、地域への啓発活動を行っている。（写真10）

④環境整備・清掃活動の充実

大規模改修によりきれいになった教室・トイレ等は生徒の意識を変化させている。「施設を大切に使う」「清掃をしっかりとやる」等の良い傾向が生まれている。今後もこの気持ちを大切に、生徒と教職員が一緒になり環境作りに



写真9 生徒総会で地域交流の呼



写真10 ネット・SNSルールののぼり

努めていきたい。また、右（写真 11）のように、お父さんたちの有志が年数回、自主的に除草・剪定等の活動をしてきている。

⑤稲美北中学校学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の推進

「地域の中の学校！ 地域とともにある学校」をスローガンとして、地域との連携を重視して教育活動を推進し、学校運営協議会を核に、これまでのコーラスや座談会等の取組を広げていき、地域の人たちが「行きたくなる学校」づくりをめざしている。



写真 11 お父さんと一緒に植え込みの清掃

(3)稲美北中学校学校運営協議会設置までの経緯

生徒会の頑張りにより、学校が落ち着きだした頃（平成 28 年）に、町教育委員会より学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の提案を頂いた。その時期は、生徒会より「地域清掃等の奉仕活動や地域交流をもっとすすめて、北中のことを地域の人に知ってもらいたい」との声が出だした時期でもあった。また、PTA コーラスの取組が広がり、地域の参加が増えだした時期とも重なっていた。まさに絶好のタイミングであった。ただ、唯一の不安は筆者（校長）を含め、多くの教職員が学校運営協議会（コミュニティ・スクール）についての知識が無く、その推進・取組についてのイメージが持てていないことであった。

そのため、町教育委員会の協力を得て、先進地視察や研修会を実施するとともに、29 年には「稲美北中学校学校運営協議会準備委員会」を当時の学校評議員や PTA 役員の方々の協力で立ち上げた。多くの皆さんの献身的な協力を得て、準備委員会（3 回の開催）の協議もすすみ、平成 30 年 4 月、「稲美北中学校学校運営協議会」が立ち上がった。それまでの経緯については下記の表 4 にまとめている。

表 4 稲美北中学校学校運営協議会（コミュニティ・スクール）設置へのあゆみ

日 時	とりくみ	内容他
平成 28 年 11 月 4 日	岡山市立岡輝中学校・岡山県矢掛町教育委員会・矢掛小学校視察	コミュニティ・スクールについて視察を行う。岡輝中学校では、地域の人たちが学ぶ「シニアスクール」を参観。矢掛町では、町教育委員会より学校運営協議会設置の経緯や組織について説明を受け、その後矢掛小学校を訪問。
平成 29 年 1 月 18 日	伊丹市教育委員会訪問	伊丹市のコミュニティ・スクール設置の経緯や規則等について説明を受ける。
平成 29 年 5 月 16 日	教職員アンケートの実施	本校教職員に対して、コミュニティ・スクールに関するアンケートを実施。
平成 29 年 8 月 1 日	校内研修会の実施	文科省 CS マイスターの小西哲也さん（兵庫教育大学大学院教授）を招き、本校教職員、学校評議員及び町内小中学校の教職員と研修を行う。
平成 29 年 9 月 5 日	学校運営協議会第 1 回準備委員会	PTA 役員、学校評議員を中心に準備委員会を立ち上げる。第 1 回準備委員会では、設置の目的を確認し、学校運営協議会設置に関する規則・要綱や学校運営委員の人選について協議。
平成 29 年 12 月 13 日	教職員意見募集	職員会議で準備委員会の報告を行うとともに、組織や活動についての意見募集を行う。
平成 29 年 12 月 13 日	学校運営協議会第 2 回準備委員会	第 2 回準備委員会を開き、学校運営委員の人選や組織、活動計画について協議する。
平成 30 年 2 月 27 日	学校運営協議会の周知	PTA 理事会において、次年度の学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の設置について説明し、協力を依頼する。また、その後の学校便りにおいて、全保護者、地域にも周知を図る。
平成 30 年 3 月 22 日	学校運営協議会第 3 回準備委員会	第 3 回準備委員会を開き、協議会の組織や当初の取組について確認するとともに、年間計画について協議する。

(4) 稲美北中学校学校運営協議会の組織

学校運営協議会組織は図1の通りである。

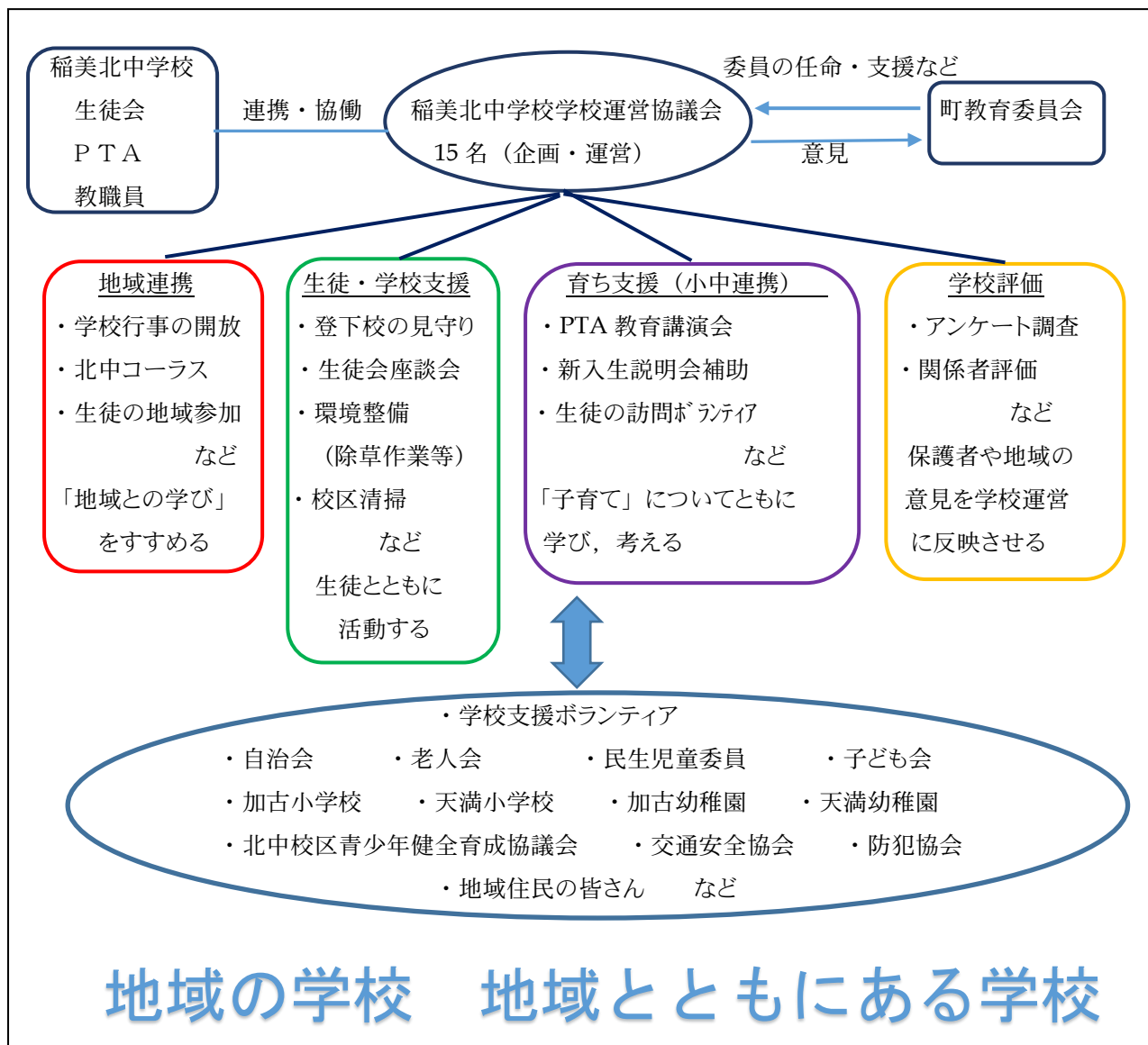


図1 稲美北中学校 学校運営協議会組織

(5) コミュニティ・スクールに関する主な活動（平成30年度）

コミュニティ・スクール初年度の本年は、とにかく「学校のこと、生徒のこと」を地域に知ってもらうことに重点を置き、生徒と教職員が地域に出て行き、地域の皆さんと交流することに努めた。その中からいくつかの活動を参加した生徒の感想を含めて紹介する。

【芝桜の植樹（環境整備）】

6月末の土曜日、早朝より学校運営委員・地域ボランティアの方々と生徒会執行部、部活動有志等、総勢90名近くで、正門前の花壇に芝桜の植樹や校内の植え込みの剪定作業などの校内整備を行った。梅雨どきで伸び放題だった植え込みもすっきりとし、来年の春、芝桜のピンク色の花が咲くのが楽しみである（写真12）。

[参加した生徒の感想]

- ・早朝から地域の方々と芝桜を植え、「来年が楽しみです」といながら作業ができた。
- ・どんな植物かと思っていざ見てみると、これが桜(?)という感じだった。しかし植えるときに地域のみなさんが優しく教えてくれたので咲くのが待ち遠しい。
- ・地域の方がとても優しく教えてくださったこと、とてもスムーズに楽しく芝桜を植えられてとても良かった。来年が楽しみ。
- ・地域の方々と植えたことは大変だったが楽しかった。新しい北中名物になってほしい。



写真 12 芝桜の植樹作業

【夏祭り『満天夕涼みの会』】

校区内の天満小学校区の夏祭り『満天夕涼みの会』に参加し、生徒会執行部が「まちづくりの会」の出店運営を手伝い、地域との交流を進めた。また、吹奏楽部もステージ出演し、素晴らしい演奏を披露した。さらに、翌日の清掃活動には生徒の有志約 50 名が参加、ゴミ拾いに汗をながした。写真 13 は、焼き鳥販売の様子である。



写真 13 焼き鳥の前でピース!

[参加した生徒の感想]

- ・いつもは食べる側だった祭りも売る側になると違った面白さがあった。みんなで昼から用意して、焼きそば・焼き鳥を売ったことは忘れられない。
- ・とてもわくわくしていた。いつもは自分が参加する側だったが、初めて店の手伝いをして、「しんどさ」を知った。焼き鳥は炭の煙が目にしみて痛かったが、少しつまませてもらったし、とても楽しかった。
- ・一緒に焼きそばや焼き鳥をつくることで地域の人たちと交流できた。同級生も声をかけてくれて楽しかった。
- ・楽しくやりがいがあった。いろいろな人の笑顔がみられて嬉しかった。
- ・不安もあったが、地域との交流もとれ、生徒会内での協力することの大切さなどを学べる良い機会となった。また、「外で活動する」＝「周りを見て行動する」ということも学べるので、続けていってほしい。

【学校運営協議会・PTA・生徒会座談会】

「親と子でこんな学校つくろうや!」をテーマに、創立 30 周年を迎えた平成 26 年度より、年に 1~2 回行っている。この座談会がきっかけとなり、環境整備の奉仕活動が実施された。コムスク元年の 30 年は、学校運営委員の皆さんにも座談会に参加した。

今年の座談会では、生徒会、学校運営委員、PTA 役員、教職員がグループに分かれて、「ネットや SNS の使い方」をテーマにして、それぞれのグループが模造紙にまとめ、意見交換を行った。写真 14 は、グループでまとめた意見を発表している様子である。



写真 14 生徒と大人と一緒に発表

[参加した生徒の感想]

- ・北中の現状を話し合い、保護者や地域の目線からの北中を知ることができた。
- ・楽しい座談会をしながら SNS について話し合っ班ごとに意見を出し合っ発表すると SNS などの危険への対策もでてきた。

- ・親から見てどう見えているのか、また地域からは北中はどうみえているのかも話し合えて、改善していくことができるので、良いと思った。また、北中のルールを親も含めどうしたいのかということも話げできた。
- ・大人の考え方や体験談にとっても驚くことがたくさんあって、とても良い経験になった。意見交換する大切さがよく分かる良い経験になった。地域の方々と1枚の紙に意見をまとめる時がとても楽しかった。
- ・生徒とは違って、保護者目線での意見を聞いたのが良かった。SNSルール改正の目安となる意見もあったので、今後の活動する上でとても役立った。
- ・自分が意見を考えるのがそんなに得意じゃないので、とても緊張していた。しかし、一緒に話し合いをした皆さんがとても優しく話しやすかったので、気楽というか楽しくできた。また、他の班の意見もまとめ方が違ったり、大人や先生方の意見も色々聞いた。

【コミュニティ・コーラス】

生徒の成長を見守るとともに生徒との交流を深め、大人自身もともに学んでいきたいとの思いから、「北中 PTA コーラス」が続けられ12年目となった。近年は、保護者の皆さんだけでなく、地域の方々や卒業生も加わり、舞台発表も文化祭はもとより、「いなみ野音楽祭」や郡連P実践発表会にも出演している。また「3年生を送る会」のステージでは、生徒と心をひとつに合同合唱にも取り組んでいる。コミスク元年の本年は、コーラスの名称も「北中コミュニティ・コーラス『North Wind（北の風）』とし、9月より活動を開始した。写真15は、文化祭でのステージ発表の様子である。



写真15 文化祭での発表

〔生徒の感想〕

- ・自分の子どもが中学生ではないが出てくださいている人もいと聞き、とても驚いた。また個人的に2曲目がとてもすてきだった。歌詞も、歌っている時の表情も見習うべきだと思った。
- ・北中と地域がひとつになっていて良かった。
- ・夜の時間を使って練習されていたのを知っていたので、歌声をきいたときはとても感動した。一人ひとりが大きな口をあけて真剣に歌っている姿は僕たちも見習わなければいけないと思った。
- ・たくさんの方が参加して下さったり、文化祭に出席して下さったり、やはり北中と地域はつながっていると思った。

【吹奏楽部の地域ボランティア演奏】

吹奏楽部はコンクールに向けて練習する傍ら、多くの地域行事やボランティアに参加している。今年も4月の「桜ウォーキング」や5月の「いなみふれあい祭り」、7月には地区コンクール直前にもかかわらず夏祭りにも参加し、地域との交流を頑張った。このような地域活動だけでなく、町内外の施設等へのボランティア活動もがんばっている。写真16は、吹奏楽部の演奏を楽しむ施設の皆さんの様子である。



写真16 老人介護施設での演奏

〔生徒の感想〕

- ・訪問演奏に行くことで幅広い年代の曲を知ることができました。私たちの演奏で涙を流してくれる方や喜んでくれる方、たくさん拍手をもらい、私たちの方が元気をもらいました。私たちが成長するのにとても良い機会になり

ました。

- ・私たちの演奏をきいて訪問先の方々が笑顔になってくれているのを見ると嬉しかったです。言葉だけでなく、音楽でもつながる人の心、そのあたたかさを感じました。

【地域清掃活動】

夏祭り等の地域行事の運営に参加するだけでなく、行事後の清掃活動にも多くの生徒がボランティア参加した。写真 17 は、12 月に実施された『いなみ冬景色 2018』の翌日の清掃活動の様子である。寒い中であつたが、早朝から 80 名を超える生徒が集まり、会場になった公園のゴミ拾いを行った。



写真 17 町内公園の清掃活動

さらに、2 学期末には生徒会の呼びかけで、3 年生全員が、校区のくもり川遊歩道や通学路の清掃活動を行った。また、冬季休業には、部活動単位で町内の公園等の清掃活動を行った。

〔生徒の感想〕

- ・私は地域交流に参加する機会があまりなかったが、コスモホール周辺清掃活動に参加して、地域の人との交流に改めて関心をもった。自分たちのふるさとをきれいに保つために清掃したら、町がとてもきれいになったように私は思った。
- ・この清掃活動をしてみてゴミがなくなってすっきりしたし、活動が終わった後のごみ袋がばんぱんになって、とても達成感があった。地域の役に立つことができるとも嬉しかったしとても楽しかった。
- ・初めてボランティア活動に参加した。今までは面倒だろうな、参加して何か得られるものはあるのだろうか、と思っていた。しかし、実際に参加して感じたことが 2 つある。1 つ目はとても良い気持ちになれたことだ。自分の町を大切にすることですがすがしい気持ちになれた。2 つ目は地域の人と交流ができることだ。普段祭りやイベントを計画し、開催して下さる地域の方たちに清掃活動というかたちで日頃の感謝をあらわすことができた。私は今、ボランティア活動のことを地域に感謝し、ふれあうことのできる素敵な活動だと思っている。
- ・このような活動もすごく大事ということが分かった。私たちは稲美町で生まれ稲美町で育っているためこのような活動をこれから積極的に取り組んで稲美町をきれいにして稲美町に感謝していきたい。
- ・ボランティア活動に参加して思ったことがある。私はあまりボランティア活動に参加したことがなく、ただごみを拾うだけだったが、いざやってみるとごみがなくなっていくにつれて何だかすっきりした。
- ・正直あまり興味がなかったが、活動してみても私たちの「ふるさと」となる稲美町を少しでもきれいにするのは嬉しいと感じた。これからは自分の意志でもボランティア活動に参加して行きたいと思う。

(6)成果と課題

生徒の現状を見ると、学校生活は落ち着いてきたが、経済的・家庭的な生徒を取り巻く環境面ではこれまでと大きな変化はない。また、生徒指導面での課題を見ると数年前までの喫煙、器物損壊、暴力行為等の反社会的行動は大きく減少したが、最近の傾向として、対人関係や家庭の悩みを抱え、不登校傾向になる生徒やリストカット等の自傷行為など、心の面で心配な生徒が増えてきている。子育てに悩む保護者も多く、虐待が疑われる生徒もいる。これまでとは違った指導や対応が必要となってきた。

そのような中、生徒たちの自己肯定感や自己有用感、自尊感情を高めたいとの願いが『北中プライド』であつ

た。「北中で学んでいること、学んだことに誇りを持てるような学校にしよう!」という合い言葉のもと、生徒と教職員が生徒会活動の活性化等を頑張ってきたことが、現在の落ち着きにつながってきている。さらに、PTAを中心とした保護者の協力や育成協等の地域の応援・見守りが大きな支援となった。このような、学校・生徒・教職員、保護者・地域との良い関係をさらに深めてくれたのがコミュニティ・スクールであった。様々な行事に参加した生徒の感想を見ると、生徒たちは地域の人たちを身近に感じ、その応援や見守りを肌で感じる事が出来ている。そして、多くの励ましの声をもらって、自尊感情が大きく高まっている。生徒の中には、地域の人に「北中のことを知って欲しい」「自分たちの頑張りを見て欲しい」との思いがさらに強くなってきている。このように、「地域とのつながり」「地域の中の自分」を生徒が意識できるようになってきていることこそがコミュニティ・スクール導入の大きな成果と言える。

一方、CSに対して教職員はどのような意識を有しているのだろうか。表5は、2018年10月に実施したCSに対する課題意識に関するアンケート調査(回答者27名)の結果である。「わからない」を除いて、各項目の平均値(1~4点)を算出した。平均値3.0を肯定的回答の基準とした場合、全16項目中14項目において肯定的回答が見られた。導入前は、教職員の理解・協力が得られるか心配なところもあったが、表の数値を見る限りでは、課題認識は低く、コミュニティ・スクールに肯定的な認識を持っていることが分かる。CS初年度にかかわらず、様々な取組がスムーズにすす

表5 コミュニティ・スクールに対する課題認識

	度数	平均値	標準偏差
(13)保護者・地域の協力が得にくい	28	3.61	0.57
(9)保護者や地域住民の声が反映されているので特に必要ない	25	3.60	0.58
(12)教育委員会のサポートが得られない	17	3.59	0.62
(14)学校の自律性が損なわれる	27	3.56	0.51
(16)教育上の学校間格差が生じかねない	23	3.48	0.73
(7)学校運営協議会委員の人材が得られない	19	3.47	0.70
(11)特定委員の発言で運営が混乱する	22	3.45	0.60
(4)従来の学校支援本部事業と変わらない	22	3.36	0.85
(10)任用の意見申し出で人事が混乱しないか	18	3.33	0.77
(8)学校支援本部事業でも十分だろう	19	3.32	0.75
(15)委員同士の意見対立が起きないか	20	3.30	0.66
(6)制度が形骸化するのではないか	23	3.13	0.76
(3)類似制度(学校評議委員会)との違いが理解できない	26	3.12	0.91
(2)学校運営協議会の成果が不明確である	21	3.10	0.89
(5)活動費や委員謝礼の支弁が困難である	11	2.55	1.04
(1)管理職や教職員の勤務負担が増えている	26	2.12	1.14

「1:そう思う 2:ややそう思う 3:あまりそうは思わない 4:そう思わない」の平均値である(「5:わからない」は除外して算出している)。平均値が高いほど、課題認識が低いことを意味する。

められた大きな要因と考えられる。しかし、「管理職や教職員の勤務負担が増えている」という点には、課題認識が高くなっている。この点については、多くの教職員が現実に負担を感じているということではないと思われる。その理由は、今年度はコミュニティ・スクール導入が教職員にとって新たな負担とならないよう、出来る限り管理職と担当教員だけですすめてきたからである。管理職・担当教員の

様子を見て、勤務負担が増えているという課題認識を持ったと考えられる。しかし、筆者も含め担当者は、少し違うように感じている。確かに仕事量は増え、時間的な負担は増えた面もあるが、地域の皆さんとの交流は、筆者たちにとっても新たな気づきや学びがあり、有意義な時間となった。そして何より生徒たちが生き生きと活動している姿、地域の人たちに認められることで自己肯定感を高めている生徒の姿を見ることは、教員にとって何よりの喜びであり、そこには負担を超えたものがある。このような体験をすべての教職員にしてもらえなかったことは、管理職として課題だと感じている。

また、このことから生徒に比べ、教職員の意識が後れを取っていると感じる。多くの教職員が気になりながら、何をしたらよいか戸惑っているところが未だにある。負担は少し増えるかもしれないが、教職員も楽しく参加できる活動を続けていきたいと思う。そのためにも、またコミュニティ・スクールが持続・発展していくためにも、教職員への情報発信を綿密に行い、情報の共有が必要である。生徒や地域の人たちはもちろんであるが、教職員も参加して楽しいコミュニティ・スクール、そして10年、20年、30年・・・と持続していく組織の基礎を作り上げることがここ数年の課題ではないかと考える。

写真18は、体育祭で地域の皆さんと生徒、教職員が力を合わせて綱引きをしている様子である。この写真のように、力を合わせて地域を愛する生徒を育てるとともに、地域に愛される学校をめざし、「地域の中の学校 地域とともにある学校」を合い言葉にこれからも取組んでいきたい。



写真18 体育祭 地域参加演技 綱引き

4. まとめと今後の課題—教育長として—

校長は学校改革のために、CSの可能性を見出し、学校から地域へと視野を広げていった。変容というよりは具体的イメージの拡大とも解される。また教職員は校長の熱意や研修を通して、CSに対する期待感を高め、主体的に関わろうとする肯定的意識に変容していった。生徒に地域の一員であるという有用感を持たせ、自分の将来に繋がる学びとなるために地域の人たちとの交流やサポート及び地域貢献は重要であり、地域の人たちにとっても自負と有用感、自分自身の学びにつながる学校となることから、学校を核とした地域の活性化を図るためにCSの導入は有効であると考え。教育長は、校長を同じ方向に導き、校長がリーダーシップを発揮できるようにサポートすることが大切であると実感した。

CSを活用し、地域の人たちと共に、稲美北中学校が存在する意味や意義を再考し、地域の活性化をこれからも共に考えていきたい。生徒や教師は今、どんな形で地域貢献ができるか考え、地域の人たちは学校に役立つことは何かと考えている。校長の熱意、努力、創造力、リーダーシップに基づき、稲美北中学校を核として、校区に学びの場が広がるために、教育長として支援していきたい。

また、稲美北中学校区には2つの小学校があり、それぞれの小学校に設置された地域学校協働本部において、コーディネーターを中心に“いなみ いきいき共育ネット事業”が活発に行われている。今後、小学校2校を合わせて、一つのCSとしていき、同時にもう一つの中学校にもCSを立ち上げながら、そちらには3つの小学校があるので、いずれは稲美町に中学校区ごとに2つのCSを作っていきたい。

また、P中学校のシニアスクールのように、本町もいつか、両中学校で地域の人たちが生徒とともに学び合う事ができないものかと考える。本年度も2名の教師が夏休みに講座を開いた。一つは技術科の教師が、コンピュータで写真を取り込んだうちわ作りを。もう1人は美術科の教師が、エッチングでストラップ作りを。参加人数は少なかったが、小学生やその保護者が、とても充実した楽しい時間を過ごしたと聞く。そこに地域の人たちの参加ができる雰囲気できればと思う。そして、同様に、数学で、英語で、社会科でできないだろうか？現役生徒も参加して・・・そうならば、地域住民の学び直しの場としての学校像への転換、教職員の専門性を生かした地域貢献や地域活性化につながるのではないかと。しかし、働き方改革が叫ばれている昨今、それには教師の負担が大きすぎるかもしれない。

刻々とかわりつつある社会の中で、現状維持では大きく取り残されてしまう危機感の中、トップダウンの改革を、どのように効果的に推進していくか、それは現場のトップリーダーである校長によるところが大きく、教育長の思いや考えを率直に校長に伝え、校長を同じ方向に導いていこうと考えてスタートした CS であったが、実際はすでに、稲美北中学校の土壌には、CS のその種は撒かれ、芽を吹き出していたのだと、気付かされた。

地域の中にある学校は、どこの学校の土壌にも建てられたその時から、地域の人たちの大きな期待とともに、CS の種は撒かれているのだと感じているところである。

【参考文献】

- ・ 国立教育政策研究所(2015)『「地域とともにある学校」の推進に向けた教育行政の在り方に関する調査研究〈報告書〉』
- ・ 佐藤晴雄 (2016)『コミュニティ・スクール』エイデル研究所
- ・ 佐藤晴雄 (2017)『コミュニティ・スクールの成果と展望』ミネルヴァ書房
- ・ 兵庫教育大学(2014)『スクール・コミュニティに向けた学校のマネジメント力強化に関する調査研究成果報告書(学校の総合マネジメント力の強化に関する研究調査)』
- ・ 藤原和博(2014)『「創造的」学校マネジメント講座』教育開発研究所
- ・ 文部科学省(2008)『コミュニティ・スクール事例集』
- ・ 山口県教育委員会(2016)『やまぐちコミュニティ・スクール実践事例集』